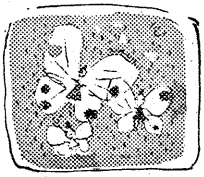

（ヨーロッパの旅）

スイス

平井信義

三月初め、ドイツを旅立った私は、ウィーン、ベニス、ミラノなど北イタリーの町まちを訪れた後、サンブロン峠のトンネルを抜けて、スイスにはいった。

この国では汽車の発車は、鐘で合図される。カランカラン――その鐘の音は、白く光っているアルプスの高嶺まで響いていくように明るい。汽車が駅を出るとたちまちいく手にも背にも、雪谿を抱いた山肌や、嶮しい谷合いが出歿し始めた。いく手をさえぎるばかり間近に迫ってくる断崖。再び眼前にはだかる雪の山。その間を、汽車は縫うようにジュネーブを目指して走っていた。

汽車の右へ左へと流れをかえる川面は、早春の陽射しを受けて輝いていた。高く輝いているアルプスの雪がこの川にとけ入るのである。岩に打ち当って飛び散るしぶきは、なお凍えたように青く光っていた。景色は、汽車が下っていくにつれ、次第に開けてくる。川面に影を映している木々の間から、整然と区画された畑が、丘をおりていくと、点々とあかい屋根の二階屋がつづく。「あれは百姓屋です」と、私の前の座席にすわっていたお嬢さんが、ドイツ語で答えてくれた。この国の人の多くは、ドイツ語の他フランス語、イタリー語、あるいは英語も話す。車掌も自由自在に各国の旅客と話をしながら検札していった。

ジュネーブの駅には、TとG両家の子どもたちが、私を待ち受けていた。五か月以上に亘る異国での一人旅の間に、私の心の底に漂う淋しさは次第にその量を増していた。純ちゃん、昭ちゃん、茂ち

ゃん、和ちゃんに取りかこまれると私は老いたけたようによろめきながら、彼らの手に鞄を渡した。それぞれが学童期となって、背丈も伸び「先生、僕に鞄を持たして下さい」と力強くいった姿には、幼雅園のとき、私の手にぶらさがったり肩によじ登ったりした面影はすっかり消えていた。私には彼らが一人前の紳士、淑女のように感ぜられるのであった。生活習慣の相違、言葉のハンディキャップを克服しながら、スイスの子どもたちの間に勉強しているこうした日本の子どもたち、彼らが故国にいるときよりも遙かに緊張した生活を送っていることを、そのおとなびた顔つきからくみとることができた。

天候に恵まれて、ジュネーブ湖畔をドライブしたり、モンブランの山頂に登ったり、これら日本の子どもたちといっしょに過している間、しばしば私の郷愁は消えたが、ある瞬間には以前にも増して、故国の妻子を偲ぶ気持がかきおこって、そのやり場がなくて困ったりした。しかし、楽しい日々であった。

三日程そうこうして、私はベルンにいった。アルプスの高嶺を、遠い雲のように眺めることのできるこの町には、目指す特別学級があった。この特別学級というのは、おそらく、ヨーロッパを訪ねても、このベルンにしかない学級であろう。それは、神経質児のための学級で、公立学校から送られた三年生のみを、勉強させる仕組みになっていた。

町の北東に当り、電車に長いこと揺られて乗り着いた場所に大きな孤児院があった。孤児院の壁は、遠目にも真白に光っていたが、前には広い畑が開け、うしろには黒々と森がつづいて、人気のほとんどない場所にあった。その建物の一画のいくつかの室が、私の目差す特殊学級に当てられていたのである。

昼の間、百人近くの孤児たちは、みな町の学校に出かけてしまう。したがってがらんとしているこの建物の一画は、この神経質児のみに与えられた世界であった。朝早く、私はこの学級の玄関についたので、畑の間から三々伍々通学してくる子どもたちを先生と一緒に迎える形になった。子どもたちは先生の脇に立っている私を、興味深そうに眺め、「グーテンモルゲン（お早う）」と大声でいい、中には握手を求めようとする子どももあった。「グーテン モルゲン」と私も先生につづいてつぎつぎに挨拶を返して、手を振った。

先生は三人とも、中年の顔立ちのやさしい人であった。私の来意を非常に歓迎され、授業の鐘が鳴ってもまだ廊下に立って、私にこの学級の内容について説明しているので、生徒が「どうしたのかといぶかしがって坐席をはなれ、四、五人廊下に出る戸口のところからのぞいていた。

この特殊学級の子どもは、ベルン市の周囲の学校から送られてくる。すなわち普通の小学校の先生が扱い難いと判断した子どもを、ここでひとまとめにして教育する仕組みになっている。すなわち、

二年生までの子どもの様子をよくみていて、どうも神経質で十分な活動ができないとか、落ちついて勉強しようとしない――という性質上に問題のある子どもを、三年生になるときに、この学級に送り込む。そして、一年間の治療教育によって、それらの性質をなおして、四年生になるときにもとの学校にもどすのである。

先生のあとについて教室にはいる。こじんまりした教室で、先生の机に向いて半円形に子どもたちの机がおかれてあった。「今日わ、をいいましょうね」と先生は立ったままで私を招介する。みんなはいっせいに口を揃えて「今日は」と言い返した。「日本というアジアの国から来たお客さんです。日本て知っているでしょう」と先生は、黒板の右肩に貼られてある地図を見上げて、日本の位置を棒でさし示した。五、六人の子どもが、知っているというような顔をしたが、あとの子どもは、黙って見上げ、すぐに顔を私の方に向けた。「このように、子どもの数を十五名にしてあるのです。子どもの個人的指導を十分に行い、クラスの静かな雰囲気を作るためには、この位の人数が一番適当です」と、先生は説明した。

授業が始まる。地理の時間である。「地図の符号として、家をこのように赤くしてあるのはなぜでしょう?」と先生がきくと、二人ほどの子どもが、黙って手を挙げた。先生は、もう一度同じ質問を繰り返しながら、一人一人の子どもの顔を見まわす。それ以上手をあげる子どもの数が増さなかったので、一人の子どもの名前を呼んだ。

子どもはすわったままの座席から「屋根が赤いから」といった。「そうですね。屋根の瓦が赤い、それからとった符号ですね」と復唱して、屋根という字をドイツ語で黒板に書き「このフランス語を知っていますか?」ときいた。二、三の子どもが、相前後してフランス語をいった。この国の言葉には、三か国語が使われている。こうした幼いときからすでに二か国語を並行して教えられるのである。

この教室の背後は、かなり大きな森だという。授業が終ると、先生は子どもたちを連れて、よくこの森の中を散歩する。そして、鳥の声をきいたり、小さな花にも目をとめて、子どもたちは十分な時間をかけて観察する。「第一、ここまでは、町の騒音が一つもきこえてきませんからね」と先生はいった。

時間がなかったので、私は二時間ほどして、チューリッヒへ去った。チューリッヒでは、ルッツ教授の教室を訪れ、問題のケース会議に列席したのであるが、そのあと、私は一人の女のケースワーカーの室に招かれた。個々の子どもの取り扱い、研究の方向などについて話し合っていたが、突然「ベルンにある学校をごらんになりましたか」と彼女はたずねた。「ええ、たいへんよい思いつきで、私どもにはうらやましいことです」と私は答えた。「近頃の子どもたちが、小さいときから、近代文明という名のもとに、強い刺激を受けることが多くなって、そのために、落ちつきのない子どもがふえてきていることにお気づきですか?」と彼女は口をつないだ。「テレ

ビ、映画、イルミネーション、町の騒音……」私はその話を受けとって「昨夕は、チュリッヒ湖畔に一時間もたたずんでいました。白鳥やその他の水鳥の泳いでいる静かな湖。しかし、その湖に背を向けて町を見ると、自動車の洪水、広告灯、乗り物の音——私はこの二つの対照を、しみじみ考えたのです。」

「でも、あなたのお国には、禅という文化があることを私は聞いています。静かな境地で、ものの性質を直観するための生活様式を、東洋人が持っていることもきいています。器械文明のいきつく先を考えると、それら器械文明は人間をとりこにし、人間の精神を奪ってしまうことになると思います。その点で、アメリカは極めて危険です。私どもスイスも、アメリカ化する傾向にありますので、私どもは東洋の文化を学び、器械文明と精神文化のよい点を、このスイスに実現したいと思っているのです」彼女は、やや紅潮した顔をして口をつぐんだ。

「日本も……」と私はいった。「生活の中にどんどん西洋文明がはいってきています。島国であるためか、よそのこと、ことに欧米のことがよく見えて仕方がない人がいます。また、ちょっとした思いつきで子どもを指導しようとしています。テレビ、映画もどんどん子どもの領分にはいってきています。東京などは、町の騒音、イルミネーションが、このヨーロッパよりもひどいのですよ」

「しかし私は日本人の生活の中に、静かなものを愛し、静かな生活を好む気持が豊かだときいています。東洋人のあなた方が、それを失ってはならない」——そういって、彼女は三月の明るさをたたえている窓外に目をやった。

スイスでの私の旅は、チューリッヒ湖畔の子どもの施設に案内されてから、トゥローゲンのペスタロッチ村に足を伸ばした。スイスとドイツの国境にあるボーデン湖を下に見ながらいき着いた丘に、ペスタロッチの子どもの村があり、約二百人ほどの環境不遇児が収容されていた。スイスの子どもばかりでなく、ドイツ、イギリス、イタリーなど八か国の子どもたちが祖国からここに送られ、祖国から派遣された先生の指導の下に、国家意識を十分に養われながら、かつ国際的な教育を受け、将来祖国に帰っても、こうした方面での仕事に尽すことができるよう、それが教育の大きな方針とされていた。

しかし、国家意識と国際間の愛情がともに養われていくことはなかなか難しい。私が訪れたのは、スエズ問題が始まる半年前であったが、すでに「植民地問題」でイギリスの子どもとギリシャの子どもとの間に、不和があることを、この村の村長格の先生が私にしみじみ語ってくれた。「どうしたら、こうした子どもたちの問題に解決がつくと思いますか？」と、その先生は真剣な顔つきで私にたずねるのであったが、私にはそれに答えるだけの自信がなかった。

（以下次号）